

桑野塾

桑野塾 検索

<http://deracine.fool.jp/kuwanojuku/>

大学などの研究者に限らず、興味を持って研究していることを自由に発表しあう「広場」です。どなたでもご参加いただけます。それぞれの興味が少しずつ重なり合うことで、新たな知見を見いだそうという場です。

第53回

2019年
1月19日(土)
15:00 ~ 18:00

早稲田大学 戸山キャンパス 33号館 231号室

★ どなたでもご参加いただけます。会場に直接お越しください。

参加無料

☆ 終了後、近くの居酒屋で懇親会を開催します。(飲食費は別途)

※予約の都合上、懇親会参加をご希望の方はなるべく事前にご連絡いただくと助かります。

※報告者・タイトルは変更の可能性もあります。ご了承ください。

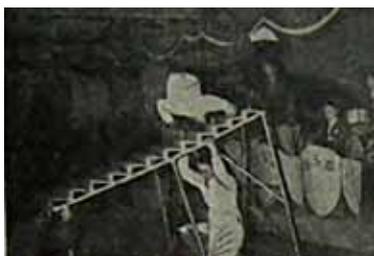


アクロバット、戦前戦後の日米を駆け抜ける

報告者：青木 深



ヘンリー松岡
『アサヒグラフ』1947年9月10日号



難波嘉一
『週刊サンケイ』1953年8月23日号



クレバ栄治
『J.T.B. Entertainment News』1954年頃



横井栄三(およびフローレンスと公子)
『少女世界』1951年1月号

アメリカに渡った軽業師たち——

ヘンリー松岡、クレバ栄治、難波嘉一、横井栄三。

現代日本の芸能史ではほとんど記憶されていませんが、彼らは、第二次世界大戦後の占領軍／駐留軍向けヴァラエティ・ショーで活躍した芸人のうちの4名です。ヘンリー松岡は坂綱、クレバ栄治は足芸、難波嘉一は頭部倒立での階段登り、横井栄三は家族で演じる自転車曲乗りを売りものにしていました。

米軍将兵を前にアクロバティックな芸を見せて戦後の混乱期を生き抜いた彼らですが、「アメリカ人の客」は決して初めての相手ではありませんでした。というのもこの芸人たちは、1900～30年代には数年または数十年をアメリカに暮らし、ヴォードヴィルやサーカス、見本市などの舞台上で演じていたからです。

今回の発表では、「見るだけでわかる」諸芸で彩られた戦後の米軍慰問ショーを鏡として、20世紀はじめから1960年代まで、太平洋をまたぎ日米を駆け抜けたアクロバットの残映を探ります。

●青木 深(あおき しん)

1975年神奈川県生まれ。東京女子大学講師。歴史人類学、日米交流史、ポピュラー音楽研究。著書に『めぐりあうものたちの群像——戦後日本の米軍基地と音楽 1945-1958』大月書店、2013、など。

論文に、「調査と表現をつなぐ時間——記録文学と歴史的民族誌的方法的検討」(『社会と調査』19、2017)、「縁と跳躍——山口昌男における「敗者」の手法」(『ユリイカ』45(7)、2013)、「エキゾティシズムを歌う——進駐軍ソングとしての『支那の夜』と『ジャパニーズ・ルンバ』をめぐる歴史人類学的研究」(『ポピュラー音楽研究』16、2013)、「戦後日本における米軍軍楽隊の活動と人的接触——1945-58年」(『ポピュラー音楽研究』14、2011)、など。